

## 少年が見た 2・26 事件

杉山 和男 *kazuo Sugiyam*  
(財)国際貿易投資研究所 理事長

- 目が覚めて窓外を眺めると、道路も近所の家の屋根も昨夜来霏々と降り続けている雪で真白に覆われていた。これでは登校は大変だが校庭で雪合戦ができるなど思っていた時、玄関の戸を激しく叩く音がした。戸を開けてみると、帽子もオーバーも雪まみれになって、平生笑顔ばかりみせている親戚の青年が緊張した顔で、「大変だ!溜池から先は剣付鉄砲を持った兵隊が非常線を張っている。彼等に岡田首相や高橋ダルマ蔵相達が殺されたらしい。市街戦が始まるかもしれないぞ」と大声で告げ、急いで家に帰っていった。昭和 11 年(1936 年)2 月 26 日の朝のことである。

彼の家は赤坂仲の町の氷川神社の北側にあり、私の家（現在の ANA ホテルの正面の坂の上に大銀杏があるが、そこに私の通う氷川小学校があり、その坂道の途中を左折した所に私の家があった。）の傍らを通り、溜池、虎ノ門を経て司法省（現在の法務省）に徒歩通勤していた彼は、溜池あたりから引き返して知らせてくれたのだろう。これが、小学校 2 年生も終わりに近かった私の接した 2・26 事件の第一報だった。それでも呑気な小学生は母親の注意も聞き流し、東京では 30 年ぶりといわれた大雪の中を登校してみると、先生から「今日は休校だ。早く家に帰れ」といわれた。

- 
- そのうち、私の家の前を溜池や山王下方面から手荷物を持って反対側の六本木方面へ避難する人達が大勢通り始めた。外に出てみると、菓子屋や八百屋の店頭は、あの人達が買っていったのか、全く商品が無くなり空っぽだった。こんな光景は初めて見る異様なもので印象深い。もう一度学校を見に行くと、もう教室も講堂も避難してきた人々で一杯だったのに驚いた。わが家では両親が避難すべきかどうか相談していたが、暫く様子を見ることにしたようだった。
  - 翌 27 日、佐倉や甲府の連隊（注 1）が上京してきたという噂は聞いていたが、退屈なので学校へ行ってみると、又驚いたことに昨日の避難民の姿は全く消えて、代りに上京してきたらしい兵隊達の宿舎になっていた。当時日曜日になると近所の連隊、特に現在の TBS の場所にあった近衛歩兵 3 連隊の兵隊が家をクラブのように使い、子供達を膝の上に抱いたり菓子をくれたりしていたので兵隊には親近感があり、又彼等から兵士の牛蒡剣は戦闘の時磨くので普段は切れないなどと聞いていたこともあり、校門前で剣付鉄砲を持っている立哨兵に、「兵隊さん、その剣は磨かないと切れないんだって？」と話しかけたら、鎮圧部隊として急遽上京し市街戦も覚悟していた田舎の兵隊だったのだろう、生意気な都会の小僧と思ったようで、いきなり銃を向けて、「馬鹿者！この剣で総理も大蔵大臣も殺されたんだぞ」と怒鳴った。仲間の 2、3 人と後をも見ずに逃げ出してしまった。
  - 28 日の午後だったと思うが、溜池まで戦車を見に行った。現在は六本木から首都高速 3 号線の下を通る道路は霞ヶ関インター方面に通じ溜池は十字路になっているが、当時は溜池で行き止

まりの T 字路で左折すると山王下、右折すると虎ノ門だった。この辺り（ITI の所在地も含め）は避難立退き地域で立入禁止になっていたようだが、同級生の家が沢山あり、その中の一人が、「ぼくの家近所に戦車がいるぞ」というので、露地というより子供がやっと通れるような隙間に精通していた我々は難なく T 字路の近くまで忍び込んだ。その町角には二米位の高さの土嚢が積まれ、完全武装した兵隊が大勢おり、一列縦隊に小型戦車が十両位並んでいた。これでは本当に市街戦が始まるかもしれないと家に走って母に報告したら、「そんな所までいったのか。流れ弾に当たるよ。二度と行くな」と大目玉をくらった。

- 29 日になると、戦闘、立退き地域が具体的に指定され、その周辺も、「屋内では銃声の反対側にいること」など注意事項が伝えられ、同時に飛行機から兵の帰順を促すビラが撒かれ、(注 2) 有名な「兵に告ぐ」の放送が繰り返し流された。

幸いに日本兵同士の戦は回避され、下士官、兵は午後になると全員原隊に戻った。私も（すでにそう呼ばれていたが）「叛乱軍」の兵達が帰ってくると聞き、現在の ANA ホテルの前辺りに走った。暫くすると、溜池方面から六本木に向かって車道の左側を指揮刀を腰に付けた指揮官（多分上級下士官）を先頭に何百人かの兵隊が行進してきた。汚れた軍服で疲れた顔をしていたが、全員左右の肩からこれも汚れて灰色に見える白襷を十文字に掛け、銃を荷い、足並みを揃え、黙々としかし整然と目の前を通っていった。子供ながら、叛乱軍となったこの兵隊さんたちはこれから一体どうなるのかと思いつつ眺めていた。

(注 3) あとから思うと、最後まで山王ホテルのあたりを占拠

---

していた歩兵第3連隊の安藤中隊であったような気がする。

- 事件解決後何日目かは覚えていないが、小学校を宿舎としていた地方からの出動部隊も引揚げることとなり、彼等の慰労のため、私達も学期末の学芸会のため練習していた劇を見せることとなった。私は大江山の鬼退治に行く源頼光の役を演じたが、講堂に座った何百人かの兵隊は、戦闘もなく無事帰郷できることとなったためであろう、皆笑顔で盛んに拍手を送ってくれた。
- 叛乱軍の将校達の軍事裁判が行われていることは知っていたし、大人達の会話で「この軍法会議は早く片付く。あまり調べると事は雲の上にも及ぶから」というようなことも耳にし、「雲の上」とは何だろう、父達兵役経験者が敬愛している秩父宮のことかなどと想像したりした。7月のある朝（後で調べると12日である。）近所の友達の家に行くと、友達は留守でそのお母さんが仏壇の前で線香を供えて合掌していた。「誰か死んだの」と聞くと、「丁度今の時間、代々木で若い叛乱軍の将校さん達が銃殺されているのだよ」と悲しげに教えてくれた。

東京の庶民達は、明治以来最大の首都の争乱が無事終わったことに安堵していたが、無謀な事件を起こした青年将校たちに、私利私欲の為ではなかったという点では同情する者も多かったのではなかったか。

- 昭和史の大転換点を象徴する2・26事件についての現在の感想は又の機会に触れることとしたいが、ここでは、太平洋戦争の末期、米軍の日本本土上陸作戦での死を覚悟していた私などが、その後60年の命を与えられることとなった終戦工作に、2・26事件で奇跡的に生き残った当時の侍従長鈴木貫太郎と、首相岡田啓介の活躍があったことを思うと、少年の日、上記のように

僅かに見聞した2・26事件が、私の人生にも宿縁のあるものだったという感想のみ述べておきたい。

- (注1) 蹶起した部隊への対応に同情や同調の意見もあって遅疑逡巡した陸軍省や軍事参議官達に対し、天皇（及び宮廷関係者）と参謀本部は当初から討伐の方針で一貫し、26日夜すでに第一師団管下の佐倉、甲府の連隊を上京させ、後には仙台の第二師団、宇都宮の第十四師団等も加わり、2万4千の兵力で、1,485人の叛乱部隊を包囲したという。
- (注2) 「下士官、兵ニ告グ」のビラ。「(1) 今カラデモ遅クナイカラ原隊へ帰レ (2) 抵抗スル者ハ全部逆賊デアルカラ射殺スル (3) オ前達ノ父母兄弟ハ国賊トナルノデ皆泣イテオルゾ (戒厳司令部)」
- (注3) 叛乱軍となった兵士は1,359人で、その内11年1月に徴兵により入営したばかりの初年兵（新兵）は1,023人とのことである。1月余りの体験で「命令絶対服従」のみ教えられた彼等には、事態は全く判らなかつたことであろう。